

社会科における主体的に学習に取り組む態度の育成の研究

ー予想から仮説へと高めることを通してー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 藤本裕貴

1. 問題の所在

昨年度の研究から、形成的評価において適切な教師コメントを行うことで、児童の単元理解が促進されるという研究成果を得られた。ここでいう単元理解とは、「知識・技能」や「思考・判断・表現」に関わる部分であり、「主体的に学習に取り組む態度」について考察することはなかった。そもそも「主体的に学習に取り組む態度」とは、どのような態度なのか。どのように育成するのか。何を見取って評価するのかなど、現場で評価する際の課題は山積されていた。

筆者にとって「主体的に学習に取り組む態度」の育成や評価方法が手探り状態のため、児童生徒にとっても評価のわかりにくさがある。国立教育政策研究所教育課程研究センターの「学習評価の在り方ハンドブック」には、「評価に戸惑う児童生徒の声」というコラムがあり、教師と児童生徒が共に納得する学習評価の重要性が述べられている。

2. 先行研究

先述したように、「主体的に学習に取り組む態度」とはどのようなものか。また、その育成評価方法には、どのようなものがあるかについて、中央教育審議会の2つの資料と2つの先行研究を見ていく。

まず、「主体的に学習に取り組む態度」とは何かを中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」から確認したい。「主体的に学習に取り組む態度」は、以下の2つの側面を評価することが求められる。それは、① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面、② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面（P11）である。また、基本的な考え方として、「…挙手の回数など、その形式的態度を評価することは適当ではなく、他の観点に関わる児童生徒の学習状況と照らし合わせながら学習や指導の改善を図ることが重要」（P12）と述べられている。具体的な評価方法としては、「ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等」（P13）と示されている。

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」には、評価にあたっての留意点が示されている。それは、「学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするものではない。子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる」（P62）である。

しかし、上述した2つの資料からは、「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な育成場面や方法について読み取ることは難しい。そこで、2つの先行研究を見たい。1つ目の米田（2021）は、「主体的に学習に取り組んでいると評価できるのは、予想を『仮説』へと高めている姿」（P18）と述べている。その理由は、「以前学習した知識を活用して学習課題を解決しようとする姿は、『主体的に学習に取り組む態度』として顕著に表れている」（P18）からとしている。ここで言う「仮説」とは、「学習課題の解を既習知識や対話により獲得した内容を活用し、それらを根拠として示すこと」と定義している。

また、2つ目の先行研究である渡部（2020）は、仮説を検討する重要性について以下のように述べている。それは、（仮説を立て発表することをしなければ）「子どもたちは自らの知識の深化・成長を実感できない」（P68）としている。上記2つの先行研究から本研究では、予想を仮説に高める場面や仮説検証で議論し、思考する場面を「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な育成場面とする。さらに、単元を通して評価を試みるため、仮説検証の単元学習をすることで「主体的に学習に取り組む態度」は育成されるか検証していく。

3. 研究の意義

「主体的に学習に取り組む態度」の育成や評価方法は、児童生徒、教師にとってわかりにくいことは、先ほどから述べている。その育成や評価方法の一つとして、仮説生成および、仮説検証授業が有効であるか考察することがこの研究の意義の1つだと考える。さらに、教師のどのような働きかけが「主体的に学習に取り組む態度」の育成につながるか検証できる点も意義の1つとして挙げられる。

本研究を通して、仮説生成や仮説検証授業は、「主体的に学習に取り組む態度」の育成につながるのか。また、つながるのであれば、それはどのような教師の働きかけかが示唆されることで、「主体的に学習に取り組む態度」の育成を促す手がかりの1つとなることが考えられる。

4. 研究目的とリサーチクエスト

本研究の目的は、以下の2つである。①児童が予想を仮説に高めることで、主体的に学習に取り組む態度は育成されるか考察する。②仮説を検証する単元学習を行うことで、主体的に学習に取り組む態度が育成されるか考察する。

そこで、以下の4つのリサーチクエストを立てた。①単元の学習課題に対する予想を仮説に高めることで、主体的に学習に取り組む態度は育成されるか。②予想を仮説に高めることで主体的に学習に取り組む態度が育成されるとすれば、それは教師のどのような働きかけによるものか。③仮説検証の単元学習を行うと、主体的に学習に取り組む態度は育成されるか。④仮説検証の単元学習により、主体的に学習に取り組む態度が育成されたとすると、それは教師のどのような働きかけによるものか。

5. 実践の状況

調査対象は、山梨県内公立小学校の第5学年1学級33人である。調査時期は、6月中旬から7月中旬。単元名は、「米づくりがさかんな地域」（『小学社会5』教育出版）、全11時間で実施した。

調査対象学級は、タイピング能力が高く、短時間である程度文章を入力することができる。さらに、ペアやグループでの意見交流は活発に行え、自分の意見と比べて聞いたり、聞いた内容を自分の意見に反映させたりできる児童が増えてきている。

6. 調査・分析方法

調査は、以下の①～⑤のように進めた。①事前アンケートの実施、②予想から仮説に高め、学習計画を考える（第1～3時）、③学習計画に沿った、仮説検証授業（第4～10時）、④仮説と単元のまとめの比較、振り返り（第11時）、⑤事後アンケートの実施である。アンケート結果は、紙幅の都合上、変化の大きかった2つのみ取り上げる。

なお、本研究では、一人一台端末を毎時間使用し、考えや学習感想などを入力させた。その理由は次の2点である。1点目は、タイピング能力が高く、書くより打った方が自分の考えを表現しやすい実態があること。2点目は、端末の使用により、自分や友だちの意見を即時に共有でき、他者の意見を参考にしやすい状況をつくるためである。授業時に「Padlet」というブラウザ上で使用できるアプリケーション

ョンを使用した。それは、自分や友だちの考えをすぐに共有でき、単元の学びの流れもわかるためである。以下の表1は、本研究の単元計画である。

表1 単元計画

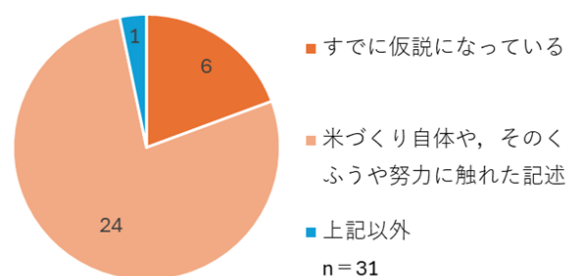
時	○ねらい ・主な学習活動 ※指導上の留意点	◇指導に生かす評価 ◆記録に残す評価
1	○学習課題を設定し、予想を立てることができる。 ・家で食べている米の産地や品種を発表し合う。 ・単元の学習課題「米づくりがさかんな地域では、人々がどのようにふうや努力をしているか考えよう」に対し、予想を立てる。	◇学習課題に対して、予想を立てている。(主)【Padlet】
2	○学習課題に対する仮説を立てることができる。 ・予想を共有して、個人で仮説を立てる。 ※仮説の根拠(既習事項や生活経験)を明確にさせる。 ※いんげん豆を育てたとき大切にしたこと、地域の田んぼの様子、同じ重さで値段の違う理由(写真)、たくさんの品種名の理由(写真)、水産業での工夫などを問う。	◆既習事項や生活経験を想起したり、児童同士や教師と対話したりして、根拠を明確にして仮説を立てている。(主、思・判・表)【Padlet】
3	○学習課題を解決するための学習計画を立てることができる。 ・仮説を振り返り、学習計画を立てる。	◇学習課題を解決するための見通しを持って学習計画を立てている(主)【Padlet】
4 ～ 10	※紙幅の都合により評価は省略する。児童の仮説を検証できるように立てた学習計画に沿って、以下の通りにすすめた。 ○どのようにして米づくりを行っているか理解できる。 ○どのようにして、おいしいお米をつくっているか理解できる。 ○収穫された米は、どのようにわたしたちに届けられるか理解できる。 ○米づくりの昔と今の違いについて理解したことを文章で表現できる。 ○米づくりの課題について理解できる。 ○米づくりの課題に対してどのような取り組みをしているか理解できる。 ※それぞれのねらいに関連する仮説を提示する。※教科書を中心に調べ、Padletへ入力する。	
11	○「米づくりのさかんな地域では、人々がどのようにふうや努力をして米を生産しているのか」を表現することができる。	◆米づくりのくふうや努力について学んだことをもとに表現している。(思・判・表)【Canva】

7. 結果と考察

ここからは、4つのリサーチクエストに沿って結果を示しつつ考察していく。

まず、リサーチクエスト①「単元の学習課題に対する予想を仮説に高めることで、主体的に学習に取り組む態度は育成されるか」について述べる。なお本単元の学習課題は、「米づくりのさかんな地域では、人々がどのようにふうや努力をしているか考えよう」である。

図1 予想段階の記述内容の分類



はじめに、第2時の学習感想で仮説生成に触れた記述と、児童が作成した仮説の内容の分析から考察する。第1時の予想段階での児童の記述状況および、第2時の仮説生成時の記述状況は図1、図2の通りである。

予想から仮説に高めることができた児童は、図2より30人中24人（A評価11人+B評価13人）いた。この内、第2時の学習感想で仮説生成について触れた20人の記述を分類すると表2の通りである。

図2 仮説の評価

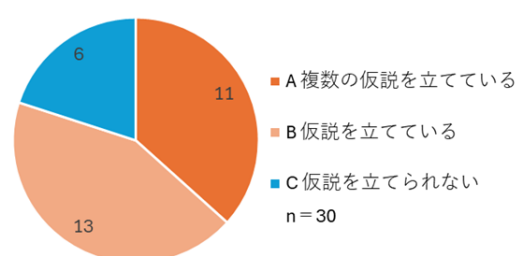


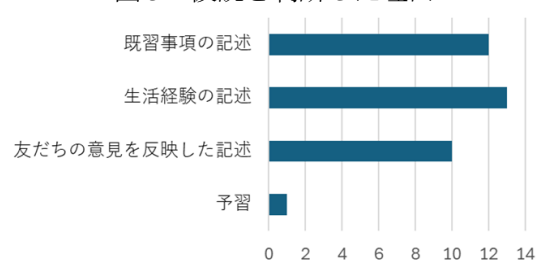
表2 第2時の学習感想で仮説について記述された内容の分類

記述内容	人数
既習事項を生かして仮説を立てた	8人
生活経験を生かして仮説を立てた	3人
友だちの意見を生かして仮説を立てた	12人
友だちと先生とのやり取りを生かして仮説を立てた	3人
その他 (予想の根拠がわかった, チャレンジタッチで勉強したことが役立った, みんなで立てた仮説に興味を持てた)	3人

※n=20 人数はのべ数

これを見ると、仮説生成をした多くの児童が既習事項や生活経験、友だちの意見のどれかまたは全てを参考にしながら仮説を立てていることがわかる。上記以外にも「水産業の学習と比較しながら考えた」や「友だちの仮説も調べていきたい」という記述も見られた。このことから、予想を仮説に高める際に、既習事項や生活経験など自分が持っているものを最大限に思い出したり、友だちの意見から学ぼうとしたりして、主体的に学習に取り組んでいることがわかる。

図3 仮説と判断した理由



※n=24 人数はのべ数

次に、児童の記述を仮説と判断した理由を集計したものが図3である。また、児童の仮説の具体的な記述内容を表3に示した。

表3 仮説に記述された既習事項の具体

既習事項の記述内容	人数
理科で肥料の使用でよく育った（おいしくなる）から肥料をあげる	3人
日光が良く当たる場所で水をたくさんあげる	1人
日光が当たる場所で育て、肥料は薬で体に悪いから入れない	1人
米は大量に水を必要とすると教科書に書いてあったから天気を見て水やりを調整	1人
高速道路を使うと米の値段が高くなる	1人
作る場所が近いと値段が安く、遠いと高くなる。水産業の学習から	1人
工場で袋に米を入れている。水産業の学習から	1人
水産業と似ていて運び方を工夫	5人
パンなどの主食があるから、水産業と似ていて米の消費量も減っている	1人
米は涼しい地域で作られているから、温暖化の影響で生産量が減っている	1人

※n=12 人数はのべ数

表4 仮説に記述された生活経験の具体

生活経験の記述内容	人数
手では重くて運べないから袋に入れてトラックで運ぶ	1人
手作業だと大変だから、大きな機械で広範囲を早く刈り取る	7人
機械は高いから、周りの農家と一緒に購入	1人
実が落ちないように注意して刈り取る	1人
食べ物がとれないと値段が上がったから、とれた量で米の値段が変わる	1人
お米は50種類くらいある。スーパーにたくさんの種類があったから	1人
祖父の田んぼでは、小さい箱に種を入れて水やりをして稲が出たら、田んぼに入れる	1人
水はちょっとずつやっている。家でバケツ稲を育てたとき、親に水が乾いたらあげてと言われたから	1人
米の健康を保つために水が大事	1人

※n=13 人数はのべ数

表5 仮説に記述された友だちとの意見を反映させた記述の具体

友だちの意見を反映させた記述内容	人数
米を育てたりおいしくしたりするには肥料が必要	4人
作る場所が近いと安く、遠いと高い	2人
高速道路や飛行機を使うと米の値段が高くなる	2人
大きな機械の使用	5人
温暖化が進み、米の生産量が減っている	3人
パンなどの他の主食があり、米の消費量が減っている	2人

※n=10 人数はのべ数

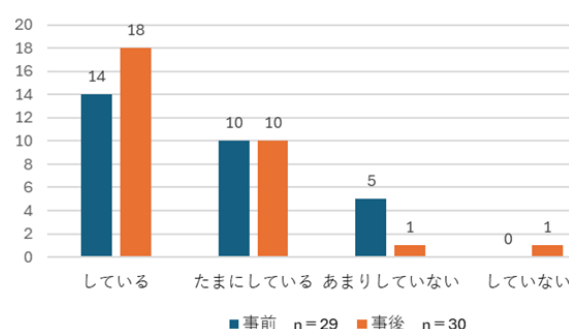
「既習事項の記述内容」では、5年生の理科で1学期に「植物の発芽と成長」を学習していたため、肥料、水、日光などについて記述した児童が6人いた。また、社会科の1つ前の単元「水産業がさかんな地域」の学習から輸送に関わる費用や工夫、工場での袋詰めなどについて記述する児童が9人いた。当初、筆者が想定していた低学年でのアサガオやトマトなど、植物の栽培経験の記述は見られなかった。このことから、直近の学習内容が現在学習している内容に大きな影響を与えたと考えられる。

「生活経験の記述内容」では、田んぼは広いこと、田植えや収穫は大変というこれまで見たり聞いたこと、機械の使用を記述した児童が7人いた。家族が米を生産している児童は数人だったが、自宅や祖父母宅の周辺に田んぼがあるという生活経験が関係していると考えられる。そこから田んぼの広さや作業の大変さを推察し、機械の必要性について記述したものと思われる。

「友だちの意見を反映させた記述内容」では、機械の使用について自分の意見に反映させた児童が最も多く5人。続いて輸送に関わる費用が米の値段に反映されていること、肥料の必要性を記述した児童が4人ずつとなった。輸送の費用や肥料については、先述したとおり、直近の水産業の学習事項と重なり、比較的共感しやすい状況であったと考えられる。

さらに、事前事後アンケート結果から質問2「新しい内容を学習するとき、これまでに習ったこと

図4 質問2に対する回答

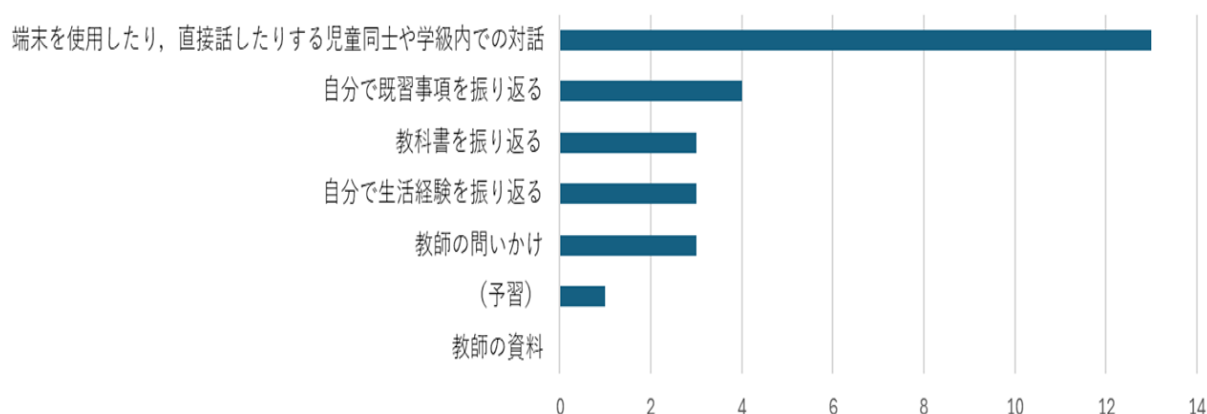


や経験したことを思い出し、それを学習に生かしていますか。」の回答（図4）を示す。ここから、既習事項や生活経験を想起し考えようとする児童の増加が見られるため、仮説生成により主体的に学習に取り組む態度が高まっていると考えられる。

以上のことから、予想を仮説に高める際に、既習事項や生活経験を想起したり、友だちの意見を参考にしたりして仮説を立てている姿より、仮説を立てることで児童の主体的に学習に取り組む態度は育成されることが考えられる。よってリサーチクエスチョン①は支持されたと考える。

次に、リサーチクエスチョン②「予想を仮説に高めることで主体的に学習に取り組む態度が育成されるとすれば、それは教師のどのような働きかけによるものか」について述べる。図5は、予想を仮説に高めることのできた24人が、予想を仮説に高める際に参考になった働きかけについて、2時間目の学習感想を分類した結果である。

図5 予想を仮説に高める際に参考になった教師の働きかけ



※n=24 人数はのべ数

最も多いのは、「端末を使用したり、直接話したりする児童同士や学級内での対話」であった。仮説生成の際に、ペアで伝え合う活動を設定したり、それを学級全体で共有したりする場面を20分弱とった。そのため、友だちの考えを自分の仮説に生かした児童が多かったと考えられる。また、Padletに入力したことで、端末上ですぐに友だちの意見を見られたことに加え、意見交流後に仮説へ追記する時間を作ったため、友だちの意見を自分の仮説に反映させやすかったと推察される。

次に多かったのは、「自分で既習事項を振り返る」が4人、「自分で生活経験を振り返る」が3人であり、既習事項や生活経験を振り返る時間を確保することが有効であると考えられる。振り返る時間を確保し、端末を活用し意見交流をすることが、仮説に高めることにつながると考えられる。

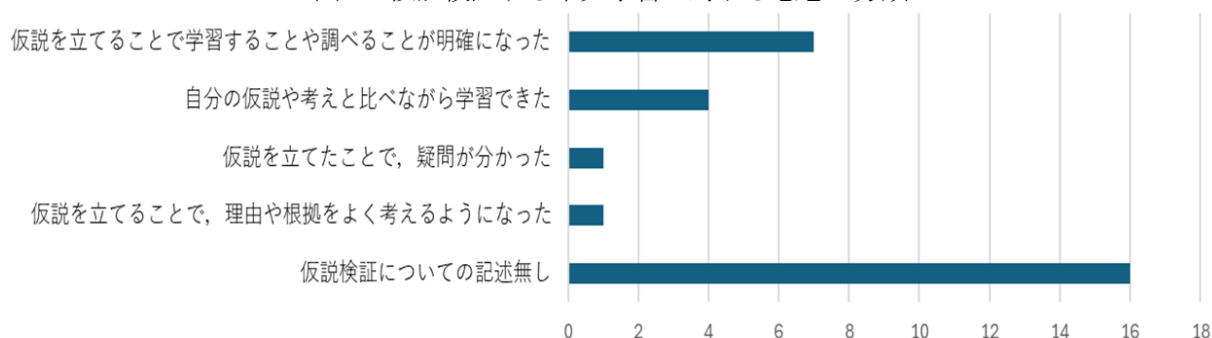
また、「教師の問いかけ」は、3人であった。これは、前述の「端末を使用したり、直接話したりする児童同士や学級内での対話」に含まれた部分もあり、教師の問いかけのみを記述した児童が少なかったことが考えられる。既習事項の想起のために行った実際の教師の問いかけとしては、「いんげんを育てたとき、大切にしていたことは何か」や「収穫した米はどのように運ばれているか」などであった。また、生活経験の想起のために、「地域の田んぼではどんなことをしていたか」、「値段の違う米があるのはなぜか」、「様々な種類の名前があるのはなぜか」などの発問を行った。

以上のことから、仮説に高める際に有効な教師の働きかけとして、端末で意見共有したり、ペアや学級で話したりする場面設定、既習事項や生活経験を振り返る時間の確保、既習事項や生活経験を想起させる教師の問いかけが有効であると考えられる。

続いて、リサーチクエスチョン③「仮説検証の単元学習を行うと、主体的に学習に取り組む態度は育成されるか」について述べる。

まず、仮説検証する単元学習について、児童がどのように感じたかを 11 時間目に行った学習感想の分類（図 6）から見ていく。これを見ると、「仮説を立てることで学習することや調べることが明確にな

図 6 仮説検証する単元学習に対する感想の分類



※n=29

った」児童が最も多いことがわかった。具体的な記述内容として、「仮説を立てると調べたいことがはっきりすること、調べることが分かった」や「仮説を立てる学習については、・・・これから何を考えていくかわかりやすいし、これからも続けたい。仮説を確かめる学習については、まとめが書きやすくなってよい」などの記述が見られた。学習に対して目的意識を持てるようになったのは、仮説検証したことによる成果だと考えられる。また、自分の仮説や友だちの考え、自分の仮説と教科書の記述など、考えを比較しながら学習に取り組めたと答えた児童が 4 人いた。仮説を立てたことや友だちの仮説を聞いたことで、自分の中で聞く視点ができて、それをもとに学習を進められたのだと考えられる。なお、筆者の指示が徹底できなかったため、仮説検証についての記述無しが 16 人になってしまった。

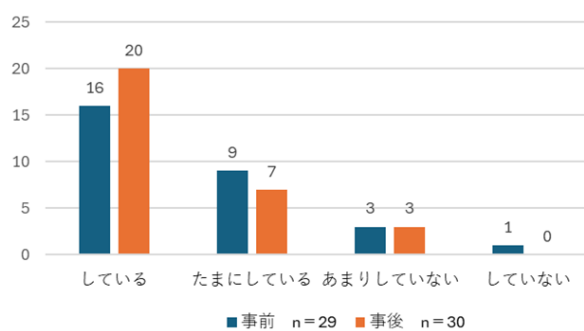
さらに、事前事後アンケートの質問 7「単元を通して解決したいことを意識して学習していますか。」の回答結果（図 7）を分析すると、意識している児童の増加が見られた。以上のことから、見通しを持って学習する児童が増えたと考えられるため、主体的に学習に取り組む態度が高まっていると推察され、リサーチクエスチョン③は支持されたと考える。

最後に、リサーチクエスチョン④「仮説検証の単元学習により、主体的に学習に取り組む態度が育成されたとすると、それは教師のどのような働きかけによるものか」について述べる。

単元全体の学習感想で、教師の働きかけに触れたものを分類すると、「端末を使用したり、直接話したりする児童同士や学級内での対話」が 12 人となり、それ以外の記述はなかった。「端末を使用したり、直接話したりする児童同士や学級内での対話」の内、Padlet や Canva による意見交流によって他者から学んだり、自分の主張に役立てたりしたと記述した児童が 12 人中 10 人いた。このことから、リサーチクエスチョン②同様、端末で意見共有したり、ペアや学級で話したりする場面設定により、主体的に学習に取り組む態度が育成されたと考えられる。

また、仮説生成したこと自体が影響を及ぼしたとも考えられえ。仮説生成により、見通しを持って学習できたと記述した児童が複数いることから、主体的に学習に取り組む態度の育成の一助になっていると推察される。

図 7 質問 7 に対する回答



8. おわりに

本研究から示唆されたことを3点述べる。

1. 予想を仮説に高めることで主体的に学習に取り組む態度は育成される。
2. それには、端末を効果的に使用して、既習事項や生活経験を想起させたり、友だちの意見を参考にさせたりする必要がある。
3. 仮説生成や仮説検証学習によって、学習内容に見通しや目的意識を持ったり、仮説と学習内容を比較したりする児童の姿が見られた。

また、仮説生成時、主体的に学習に取り組む態度を育成するために有効な教師の働きかけとして以下が挙げられる。

1. 既習事項や生活経験を振り返る時間の確保。
2. 端末を活用した即時的な意見交流や、それを自分の仮説に追記する時間の確保。
3. ペアや学級全体での対話の時間の確保。

加えて、単元の学習中でも、上記2と3の働きかけが有効だと考えられる。

次に研究の課題を3点挙げる。1点目は、予想を仮説に高められない児童へのフォローである。自分の仮説が無ければ、仮説検証の単元学習を自分事として行うことが難しい。そのため、仮説が立てられるよう、友だちの仮説で共感するものを選ばせることや、文章化が難しければ教師と個別のやり取りで聞き取ることもできたと感じた。

2点目は、仮説が個人個人で異なっていたため、自分の仮説にない学習内容を自分事にするのである。これについては、授業の導入時に、学習内容に関係する仮説をいくつか提示し、自分の考えに近い仮説に挙手させることで学習課題を自分事にできると考える。

3点目は、どのレベルの記述を仮説とするかの判断である。今回は、既習事項や生活経験、学級内での対話から、根拠を明確に示していれば仮説と判断した。前もって児童に仮説とは何か説明し、具体的にどのような文章が仮説と言えるのか、確認しておく必要があるだろう。

最後に、本研究を現場で活用する際の留意点を述べる。まず、上述したように教師や児童が仮説とは何か、どのような文章であれば仮説と言えるのかを共有することである。本研究では、仮説に慣れるため、授業研究の前の単元である水産業のさかんな地域の学習で、仮説とは何か説明し、実際に仮説を立てることも行った。また、教師がどのような仮説を書かせたいかイメージすることが重要である。最終的に単元で学ばせたい内容から逆算して、発問や資料を用意する必要がある。

9. 参考・引用文献

- ・大石学 小林宏己ほか (2024), 『小学社会5』, 教育出版.
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター (2019), 「学習評価の在り方ハンドブックー小・中学校編ー」.
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 (2019), 「児童生徒の学習評価の在り方について (報告)」.
- ・中央教育審議会 (2016), 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」.
- ・藤本裕貴 (2024), 「形成的評価における教師コメントの効果の研究ーOPPシートを活用した小学校社会科の単元理解の変容を通してー」, 『山梨大学教職大学院教育実践研究報告書』, pp.119-126.
- ・米田豊編著 (2021), 『「主体的に学習に取り組む態度」を育てる社会科授業づくりと評価』, 明治図書.
- ・渡部竜也・井手口泰典 (2020), 『社会科授業づくりの理論と方法ー本質的な問いを生かした科学的探究学習ー』, 明治図書.